

町と村の夏祭り

初夏、かつて、桶川は麦は収穫の時を迎え、雑木林の新緑と熟した麦畑が織りなす美しい光景を見ることができました。

麦の収穫を終えると、豊作を喜び、農作業で疲れた身体を休め、さらにきびしさを増す夏に向かい、健やかに暮らすことを願って、桶川の町と村では夏祭りが行われてきました。



麦の始末は祇園まで

「麦の刈りしん（時）は ちょうなつくび」

大麦の穂が手斧の刃先のように垂れると、農家は一年でもっとも忙しい季節を迎えます。

五月が来れば 忙しや 日が暮れるよ 庭には麦が山ほど
麦打ち唄は 伊達じゃない この唄はよう 暑さしのぎの投節

麦刈りは、梅雨の晴れ間をぬって行われ、麦の始末、すなわち脱穀作業は、芒（のげ）をきれい落とすため、天気の良い日を選んで行われました。

くるり棒で麦の穂を打つ麦打ちは、暑いさなかに汗とほこりにまみれるとても苦しい作業であったそうです。つらさを忘れ、調子を合わせるために麦打ち唄を歌いました。

「麦の始末は祇園まで」。麦の収穫を終えると、いよいよ夏祭りの季節を迎えます。



村の夏祭り 一村まわり行事

麦刈りを終え、梅雨が明けると、いよいよきびしい夏の暑さがおとずれます。

収穫を終えた喜びを共にし、酷暑がもたらす疫病退散を願って、市内の農村では村まわり行事が行われます。

獅子頭や天狗を先頭に、囃子の一行も加わり、村内の家々をめぐる悪魔をはらいます。

今回の展示では、桶川市の東部倉田地区の祇園祭りを紹介します。

・倉田の祇園祭



桶川市の東南部にある倉田の祇園祭は、古い伝統を伝える行事として貴重なものである。

毎年7月14日に近い日曜日に、氷川神社の氏子54軒の家々をまわって、疫病退散と五穀豊穡を祈願する祇園祭が行われている。

祭り当日の朝、倉田氷川神社に合社されている八雲神社を地区の共有地にある仮小屋（現倉田集会所脇）に移す。ここ神輿とともにまつられた後、村まわりが始まる。

村まわりの一行は、神霊をうつした「牛頭（ぎゅうとう）」と呼ばれる幣串を先頭に、天狗、獅子頭、山車（だし）持ち、万燈の順に進む。この行列に、軽トラックにそれぞれ乗せられた神輿と囃子方が続く。氏子の家々をまわる途中、13カ所の休憩所で合流し、飲食をともにする。収穫されたばかりの小麦で作られた饅頭もこのときに振る舞われる。

昭和30年代までは各家の室内には莫塵が敷かれ、村まわりの一行は土足のまま縁側から入って室内を通り抜けたといわれている。



獅子頭

牛頭天王
(ぎゅうとう)

桶川祇園祭 一町の夏祭りー



八雲神社（旧市神社）

桶川祇園祭は、中山道桶川宿の路上にあった市神の祭礼として、元文3年（1738）に始まった、と伝えられています。

市神としてまつられた祇園牛頭天王に夏の疫病退散を願う祭礼は、宿場の発展とともに、華やかな町の祭りへと成長していきました。

紅花の取引が隆盛を迎えた江戸時代後期から幕末には、江戸の祭礼の影響を受け、人形をいただいた山車や、大きな獅子頭が作られるようになり、多くの人びとを集める町の祭りへと成長していきました。



明治時代の山車

市神社が八雲神社と名を変えて桶川稲荷神社の境内に移された明治以降も、その伝統は受け継がれています。

現在の祭りは、昭和35年（1960）に一時中断されたものの、市制施行を経て、現代の都市桶川の祭りとして再生し、いまなお多くの人を集め、成長を続けています。

八雲会の神武人形



「神武人形」は、桶川宿下町（明治以降は立花町）の山車の上に飾られています。

このような山車は、大正から昭和初期に、現在の屋台型に改造されるまで用いられていた。

栄会の山車人形



栄会の会所の前に置かれる人形は、かつて、町内の山車の上に飾られていたもので、三国志の英雄、関羽をかたどっている。

人形の台座の墨書によると、明治25年（1892）にこの関羽の人形が松木（本）喜三郎の門人、石村定吉によって作られたことがわかる。

本街保存会の夫婦獅子



獅子頭は安政4年（1857）に作られたものである。武州桶川宿本街保存会では、昭和57年（1982）にこれを修理し、舞の復活にも取り組んだ。以来、本街保存会の夫婦獅子として知られるようになった。

安政4年頃は、桶川宿が麦などの穀物や桶川臙脂と呼ばれた紅花の集散地として発展する中で、祇園祭が盛んとなった。

町内に結集する人びと

桶川祇園祭は、中山道桶川宿以来の伝統を受け継ぐ町内の保存会によって担われています。各保存会は、桶川宿の上町は相生会に、上中町は本街、下中町は栄会、下町は八雲会にそれぞれあたります。

祭りの日。町内ごとに会所を構えて神を迎え、神輿や山車をしつらえ、人びとは祭りの時をともにします。

また、各町内には、囃子棚がしつらえられます。ここでは、村の囃子連が招かれ、囃子が演じられます。



未来へ継承される祭り

桶川祇園祭では、町内の山車で子供たちが囃子と踊りを演じています。

この伝統は、昭和42年に子供会活動として囃子に取り組んだことに始まります。

やがて、子供たちは祭りを担う若者に成長し、世代を重ねています。祭りをおして町づくりを担う人材が育ち、祭りもまた成長を続けているのです。

